

現代国語教育論集成編集委員会編

編集・解説 菅原 稔

『現代国語教育論集成 東井義雄』

本書の四三三頁に記されているが、東井義雄氏は、昨年（一九九一年）四月十八日に亡くなられた。本書の刊行が六月であることを考えると、まさに「本書の刊行を目前にした」ことである。

東井氏が広島大学からペスタロッチ賞を受賞した（昭和三十四年）こともあって、東井氏逝去の知らせを本書の編集・解説をされた菅原稔氏から研究室にいただいた。助手の山元悦子さんが席を開けている間たまたま研究室の電話番号をして

いた私はその電話を受けた。恥ずかしくも不勉強にして東井義雄の名さえ知らなかった私に、知っておくべき人として、菅原氏は、東井氏が戦後を代表する教育実践者であること、全集が研究室にもあること、先生が修士論文で東井氏をテーマとされたこと、その後ライフワークとして東井氏の研究に取り組まれていることをお教えくださった。

受話器をおいた後、すぐに『東井義雄著作集』第一巻の扉を開けると穏やかな

表情をした東井氏がこちらを向いていた。そして、そこに納められている「村を育てる学力」によって東井氏の教育実践の一端に触れた。やがて本書が大学生協の書棚に並ぶとすぐに買い求めた。

東井義雄氏は、兵庫県において昭和七年から昭和四十七年の四十年間にわたって教育実践を行い、その間、またその後もすぐれた実践記録や論文を数多く発表してきた。当時の教育界に大きな反響を呼んだ不朽の名作といわれている『村を育てる学力』（明治図書、昭和三十三年）をはじめとして、多くは戦後の実践によるものであり、国語教育に関するものも数多い。「第二次世界大戦後の先覚」（現代国語教育論集成刊行にあたって）として、『現代国語教育論集成』の第四冊目に取り上げるに最もふさわしい人物の一人と言えるだろう。

本書は、「I章 人と業績」「II章 論集」「III章 解説」からなっている。

I章では、東井義雄の教育実践・理論の内容と意義が、次の三項目によって述べられている。

一 “生きていくことのただごとでなき”
“いのち”の自覚に基づき、その“いのち”の表れである、一人一人の児童の思い方・考え方を何よりも重視する、自己教育の立場に貫かれたものであること。

二 “書く”ことを中心とし、その機能を十分に生かしながら、学習内容を児童の生活上の問題としてたぐりよせ、自分の問題として考えさせ分らせる、児童の内面活動を重視したものであること。

三 学習主体の確立と集団内での解放とが図られた上で展開される、学習の結果のみではなく、過程をも重視するものであること。

東井氏の実践の根底に流れる「いのちの思想」、「生活の論理と教科の論理」論、そこから生まれる氏独自の「ひとりしらべ」↓「わけあいみがきあい」↓「ひとりしらべ」という指導過程の三者の関係が明らかにされており、東井氏の実践の枠組みをつかむことができる。

II章には、東井義雄氏の国語教育論・

実践論が体系的にまとめられているとされる「国語授業の探求」や、国語科教育論、作文・綴り方教育論、教育実践論に関する論考が納められている。

III章には、菅原氏の二つの論文が解説として掲載されている。一つは戦前の東井氏の綴り方実践に関する「児童の臣民感覚」と東井義雄の転向」であり、もう一つは戦後の学校長としての実践記録である。

ある「培其根」に関する「八鹿小学校の実践報告誌「培其根」の内容と意義」である。

本書は、国語教育の観点から東井氏の教育実践・理論を見るに格好の書であると言える。

(A5判 四三三ページ 一九九一年六月発行 明治図書刊 三、二〇四円)

(間瀬 茂夫)